

<研究室余滴>社会主義と土地問題

著者	丸毛 忍
雑誌名	社会労働研究
巻	3
ページ	82-82
発行年	1955-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10114/00017381

社会主義と土地問題

丸 毛 忍

土地問題が資本主義国の農業にとって重要なことはいうまでもないが、社会主義国（ここではソ連を考える）では土地の私有廃止、国有化とコルホーズによる土地の永久無償利用とが原則だから、土地は商品として売買や賃貸借の対象とならないし、もちろん価格をもたず、地代を生まない。したがって社会主義農業には土地問題はないと考えられがちである。

ソ連でもこれまで土地国有、絶対地代の廃棄を中心とする土地の制度的な側面はいろいろ論ぜられてきたが、土地の経済的側面というか、土地そのものについての差額地代論的考察は比較的閑却され、むしろ素朴な機械化農業論にもとづく資本の土地（自然）に対する優位という考え方が支配的であった——これは立場こそちがうが、T・W・シュルツの最近のアメリカ農業について土地の特質と優位を否定する説と共

通のものをもつ。

なるほど土地の私有廃止は絶対地代をなくすが、土地の制限と経営の独占があるかぎり、ただちに差額地代にあたる部分までなくしてしまうとはいえない。だから当然のことながら、ソ連の農業がしだいに集約化の方向に進み、生産手段としての土地の利用、収量増大、土地豊度の引上げが大問題となるにおよんで、従来閑却されていた土地の経済的側面、その差額地代論的考察が重要となってきた。一九四四年にI・ラプチエフの『コルホーズ収入と差額地代』のような新見解が突然現れたのはこのような事情を反映していたといえよう。近刊のソ連『政治経済学教科書』の一節「社会主義下の差額地代」はこのラプチエフ説を改訂・発展させたものである。

教科書によれば、社会主義下の差額地代は基本的にはコルホーズ的所有と商品生産

の存在に結びついており、それはコルホーズの土地の豊度、位置、利用率の相違および独自の農産物価格形成方式にもとづき、コルホーズ生産物の個別的価値と社会的価値の差額であるコルホーズの追加的収入の形で実現される。だが資本主義下の差額地代とことなり、搾取と無関係な農民とMTS職員の集団的な労働の結果であり、小作料の形で土地所有者に支払われるわけではなく、コルホーズ、コルホーズ農民および一部は国家の収入になる点が重要だという。筆者は本誌で、この差額地代論の一つの手がかりとして、今日のソ連にとって重要な土地問題である自然改造計画（土地改良、開墾）、コルホーズの多角経営（土地利用）について考察を試みたいと思っていたが、そのためには差額地代論はなおあまりにも未展開であるといわねばならぬ。

ここでは、社会主義国でも土地問題がちがった意味でなお重要であること、しかし社会主義農業を考察する場合、地代論はこれまでの経済学におけるような重さをもたないことを指摘するにとどめたい。